

〈実践レポート〉

「大学院留学生のための論文指導講座」を終えて

徳田 かおり*

Japanese Thesis Writing Tutorial for International students

Kaori Tokuda

はじめに

2016年9月、10月の2カ月間（週1回90分コマ、合計8回）、日本女子大学人間社会学部大学院留学生4名（希望制）の「日本語論文指導講座」を担当した。受講者の内訳は、社会福祉学科3名、相関文化学科1名であった。

授業の進め方は、論文作成を題材とした教科書であるアカデミック・ジャパニーズ研究会編著（2015）を用いて、論文に使われやすい日本語の表現を学びつつ、自分の書きたいテーマで小規模な論文⁽¹⁾を少しずつ書きすすめ、仕上げていくというものであった。8回という授業数で、小規模といえども論文を作成していくのは容易ではない。宿題も含め、必然的にタイトなスケジュールが要求された。

授業期間中の課題及び論文原稿の提出にあたっては、メール送付と印刷されたものを直接提出させる方法をとった。また、メールにより、論文原稿の訂正のやりとり、次の授業の連絡と学習事項提示等を行ない、授業時間数の少なさを補うよう、積極的にコミュニケーションを図った。

授業に関しては、その日の授業ごとにテーマとそれに沿った課題を設定した。本稿では、各回の授業ごとに、どのようなことを実行し、どのような反応があったか、院生の様子や教師の感想と反省なども交えた全8回の授業の実践報告を行なう。

1. 初日「オリエンテーション」「論文とは？」

初日のテーマは「オリエンテーション：仲良くなる教室作り」であった。互いに知らないもの同士が、8回のクラスを作り上げていくことになる。そのためには、まず、以下のことを知る必要がある。

- 1) ニーズを知る。なぜ、このクラスを受講したのか。どのようなものを得たいのか。
- 2) 日本語力を知る。院生はどのような日本語能力があるのか、そこにどのようなものを足していけるのか。
- 3) 個性、興味を知る。院生は何に、どのような関心を持ち論文を書こうとしているのか。

上記の三項目に関して情報を得るため、「自己紹介シート」で以下の質問に答えさせ、それをもとに手短かに自己紹介をさせた。

- (1) どうして、社会福祉学科、文化学科を選びましたか。
- (2) 何に興味がありますか。
- (3) どうして、この講座を受講しましたか？何をこの講座で学びたいですか？

受講者それぞれの回答をまとめると、次のようになる。

受講者Mは、「様々な社会問題に興味があったので社会福祉学科を選び、特に高い率の自殺とソーシャルワークについて関心がある。日本語で美しく表現し、上手く説明でき、正しくわかりやすく文章を書けるようになりたい。」ということであった。

受講者Eは、「学部のとくに学んだ国際貿易に従

* 新45回生／早稲田大学日本語教育研究センターインストラクター（非常勤）

事する人の子育てや婚姻状況に興味があり社会福祉学科を選んだ。特に夫婦間の勢力関係とその要因に興味がある。この講座を選んだ理由は、短い言葉を書くことは難しく、長い文章を作ることは難しく、段落と段落の接続、句と句の接続が特に難しい。論文の書き方や論文慣用の言葉（社会福祉用語）を学びたい。」ということであった。

受講者Cは、「その国の文化や文化の裏にあった出来事に興味を持っているので文化学科を選んだ。民俗、民俗の形式、由来などに興味があり、特に中国吉林省の長白山（白頭山）の象徴主義について調べたい。この講座では、論文の構成、各項目のまとめ方を学び論文を良い形で書きたい。」ということだった。

この日は欠席で、後日参加した受講者Sは、「将来、人にやさしい仕事である介護福祉士になりたいので社会福祉学科の介護福祉士コースを選んだ。特に地域における高齢者福祉に興味を持っている。論文作成が難しいと感じ、論文作成のスキルを学び、わかりやすい論文を書きたい。」ということだった。

受講者に共通して言えることは、論文作成に関して難しいと感じているということであり、論文特有の日本語を学び、日本語能力のレベルアップを図りたいということであった。

その後のディスカッションでは、「日本人が書いた論文と変わらない日本語で論文を書きたい」という意見が出た。「話したり書いたりするときに、どうしても留学生らしいミスをしてしまう、特に書くことは難しい」と述べる受講者もいた。最終的に、このクラスの最終目標として「母語話者が書いた論文と変わらない日本語で論文を書くこと」が設定された。

口頭による自己紹介と各自シートに記入させたことにより、受講者個人の日本語力と個性や考え方を知ることができた。なお、この「自己紹介シート」は下3分の1ほどが「ふりかえりシート」になっており、「(4) この講座を受講して学びたいことが学べましたか。どんなことがよかったですか。」という質問が書かれており、この授業の最終日に、当初の目的が達成できたかふりかえり、記入できるようにしてある。

次に、授業の中で「今から書こうとしている論文とは、どのようなものか」と問いかけたところ、

「何か言いたいことがあって説明していくもの」、「説得力のあるもの」、「役に立つもの」などの意見が出た。先行研究で論文を読み始めている受講生もいて、どのようなものを書くかについてのイメージは確立されており、半年後ないし一年後に修士論文を書かなければならないことを自覚しているようであった。

さらに、論文のテーマを決めるために、ブレンストーミングを行なった。ここでは、いわゆるマインド・マップの手法を用いて、白い紙の中心に興味のある事柄をおき、そこから枝葉を分れさせ発想を広げるよう指示した。とにかく思いついた語をつぎつぎ書かせ、頭を整理させ、そこから一部の語を取り出し、組み立てることで、論文のアウトラインを書いていく。ここで時間となり、アウトラインは次週までの宿題とした。

教科書については、第1課の「作文の基本(1)」を皆で少しずつ読みながら、構成や利用法を確認した。今後は、論文に使われる表現を学ぶために、一回に二課ずつ進めることとした。

2. 第2回「序論を書こう」

第2回の授業の課題は、自分の書こうとする論文のタイトルとアウトラインを口頭で説明することで全体像を確認し、それを元に論文の「序論」を書くことであった。口頭で説明をさせるのは、より頭が整理され書きたいことが明確になるため、また、他の受講生との質疑応答（ピア・レスポンス）により、論文の表現や内容が深まると考えたからである。以下に、筆者の授業日誌により、院生の様子などを記す。

<第2回目>アウトラインを書いて、論文のポイントを押さえて説明させる。→思ったより時間がかかった。教科書の練習問題をやるので（時間的に）精いっぱい。体系的にまとめる！こともやらないと何を得たかが残らないかも。論文を書き進めていくことで疑問や迷いも生じるし、一本書くことで自信がつくと思うが…。問いかけると返ってくるので、引き出したものを上手にまとめていくことが必要。問題の正解、不正解でジャッジするのではなく、院生に

気付かせる。もっと、(3人ともを)ほめる！
○○さんがちょっと遅れぎみ。さすが大学院生
「3名とも実力あり」との手ごたえ。

結果的に、話す活動に時間がとられてしまったが、これは、個人の書きたいことが溢れ出し、何とか日本語で説明しようとしたことによるものである。一人ひとりが話したいだけ説明したあとで、他の受講者から質問していく方式をとったのであるが、自分の興味や専門的な分野について、日本語で表現したいという姿勢が各受講者に強くみられた。教師は、あまり介入せず「○○というのは、○○ということですか。」というような理解しにくいことがらへの確認に徹するようにした。口頭で発表したことにより、書きたいことや自分の興味について、各々の中でより明確な理解が深まったようであった。

教科書については、第3課の「課題の提示」と第4課の「目的の提示」の部分を使用し、教科書の「クイズ」、「構成要素」、「文型と表現」の解説と「練習問題」を行なった。練習問題は時間を決めて、受講者が解き、一問ずつ担当を決めて解答し、それに教師が解説を加えるという方式をとった。教科書の練習を通じて、「序論」に使われる表現・文型を確認し、各自が論文の「序論」を書く際に参照できるようにし、次回までに各自の論文の「序論」を書くよう指示した。

3. 第3回「参考文献を探そう」

第3回の授業では、次週が祝日で休みであったため、二週間で参考文献を読み込み、必要な情報を収集することを課題とすることにした。

参考文献を探すことに当たっては図書館の有効利用が欠かせないため、この授業では、特別に事前に依頼して、本学図書館のパソコンの利用予約をし、受講者が図書館の職員から「文献の探し方」の説明を受けられるよう手配した。

最初の30分で、図書館職員から、電子検索 CiNii などを使った「文献の探し方」についての説明を受け、その後30分間ほどで、自分の書こうとする論文のキーワードを入れ、最低、論文一本、単行本一冊を見つける活動をした。受講生からは、求める参

考文献が、その場では手に入らなくても、「参考になる論文が探せたので院生室で印刷する」、「他から取り寄せる手続きをした」などの声があった。この活動は、「文献の探し方」について専門家からの新たな情報が得られ、受講生にとって有益であったと思われる。

次に、図書館の共同会議室に移動し、なぜ参考文献が必要なのか、論文のどこの部分に利用するのかを話し合い、二週間で文献を読み込むことの必要性を確認した。その後、教科書第11課「引用」を利用し、引用に使われる文型と表現を確認し、論文で引用を行う方法を学習した。

また、事前に回収した宿題の「序論」をもとに、一人ひとり質問しながら、その内容についてコメントをした。さらに、コメントした部分を修正した「序論」を、メールで提出させることにした。メールで提出された「序論」については、今度は表現についてコメントを入れて返却し、受講者は、それに再修正を加え、次の授業の時に印刷し持参することにした。

4. 第4回「本論を書こう(1)」

二週間の休みが入ったため、その後の授業がスムーズに行えるように、前日の早い時間帯に以下のようなメールを受講者に送信した。

Mさん、Cさん、Eさん
こんにちは
明日の論文指導講座は〇時〇分～〇時〇分まで
〇〇で行います。
提出物は、修正した序論を印刷したものです。
宿題は、参考文献を読み込み、引用にしたい箇所をピックアップしてくる事です。
パソコンはいりません。
明日は、教科書中心にすすめます。(2課&10課、
復習<1課、3課、4課、5課、11課、12課>)
序論の書き方を復習し、本論につなげます。
(予定表においつくように、頑張りましょう！)
明日から、○○さんが参加予定です。
(もし、連絡があったら、そのようにお伝えください。)
では、また明日

授業では、まず、この日から参加の受講生に簡単

に自己紹介をしてもらい、この講座の授業の進め方を確認した。そして、教科書で扱った課を1課から復習を兼ねて確認していった。また、新たに、2課の「作文の基本(2)」で、話し言葉と書き言葉の違いを確認した。5課の「定義と分類」、10課の「列挙」を比較的丁寧にとりあげ、休んだ院生に対しては、宿題として練習問題を解いておくように指示した。これらの課は、本論を書くときに使われる表現を含む課なので、実際に学んだことを活用し、次週までに、「序論」につなげて、「本論」を書いて来ることを宿題とした。

授業の後半では、「序論のモデル文」を読み、序論の構成はどのようなものかを再確認した。そして、2名ずつのペアになり、相手の序論を読み、構成と表現についてコメントを加える活動をした。お互いに、いいところを褒め合ったり、わかりにくいところを指摘したりしていた。他者の論文を客観的に読むことは、自分が書く上でも参考になるであろう。

5. 第5回「いい論文とは？」「本論を書こう(2)」

第5回から第8回までは、授業前日までに、提出物と授業内容を明記したメールに必ず激励の一言を添えて送信するようにした。書くという作業の正念場だからである。

第5回の授業では、まず、いい論文はどのようなものか考えてもらうことにした。各々にポストイットを数枚配布し、一枚に一つずつ、自分が考えるいい論文とは何かを一人四枚以上書くよう指示した。「内容が簡明であること」、「構造的にわかりやすいこと」、「言葉の使い方が正しい」、「研究目的が明らかであるもの」等の意見が見られた。受講者全員で相談し、模造紙上で類似の内容のグループにわけ、ペンでタイトルをつけていった。グループのタイトルは以下のとおりである。「視点／目的」「内容」「構成」「論拠」「オリジナリティー」「日本語」。この活動は、どんなことに注意して書くか喚起するために行ったが、これを教師が表にまとめ、評価表を作成した。最終授業で、他の受講生の論文を読んだときの評価の指針として使用するためであった。受講生から「KJ法⁽²⁾だ」という声があがった。さす

が大学院生であると感じた。

次に、今回の授業では、教科書については、8課の「対比と比較」、9課の「原因の考察」を扱った。

また、提出された「序論」と「本論」については、一週間しかなかったせいか、書きなおしたものを印刷してこない受講生や書きなおしたいと言う受講生がいたので、全員、メールで再提出をさせた。メールで提出された原稿は、1) 訂正が必要なところを青字に変換し、2) 青字だけでは分かりにくいものにはコメントをつけ、3) 各自の問題点を返信メールに書き出して、一人ひとりに返信した。初めに、青字のみで訂正を加えたのは、各自に考える余地を残したためである。違うことを指摘すれば、なぜ違うか考えるようになるからである。対面での訂正と違い、メールでの訂正は難しい。どうしても一方的になってしまうからだ。表現一つをとってみても、日本語の文章としておかしいことはわかるが、どこをどの表現に換えるかは、いくつかの方法がある。まず間違いを指摘し、次にいくつかの表現を提示することで、自分で考えられるよう工夫した。これは、一人で論文を書くときに、自己の表現で迷わず書けることを想定している。

6. 第6回「結論を書こう」

授業では、教科書13課「帰結」、14課「結論の提示」で、結論の構成、文型と表現を学び、結論に使われる表現を学習した。そして、「序論」「本論」に「結論」を加え、なるべく早く提出するように、指示した。

次に、個人指導の時間を設けることにした。

前回の宿題の「序論」「本論」については、前出のようにメール添付にてやりとりをし、受講生には、コメントをもとに再度修正を加え「序論」「本論」を印刷して提出することを宿題としてあった。教師は、それぞれの「序論」「本論」を再度確認し、印刷して持参した。それらを突き合わせ、一人10分間程度、教師と受講者が対面で内容や表現について個人的に質疑応答する時間を設けた。個人によって質問したい内容が違うため、個人指導は大変有効であった。

7. 第7回「小規模な論文を仕上げよう」

第6回から第7回までの一週間で、添付ファイルでのメールのやりとりを一往復から二往復にし、「序論」「本論」「結論」を完成版に近づくように、アドバイスをした。授業とメールでのやりとりが確立してきた。

一人10分間を目安に、「序論」「本論」「結論」を返却して、内容や表現についての確認やアドバイスをした。ただし、教師が他の受講生と話している間は、パソコンを持参しての作業も許可し、個人作業をさせた。実際、パソコンを持参し、脚注の付け方など機械の操作を教え合っている受講者もいた。

この「序論」「本論」「結論」に、教科書の「参考文献の書き方」を踏まえて、「参考文献」を加え、完成版を作成して、メールで提出することが、最後の宿題となった。

また、授業中に扱えなかった、間違えやすい副詞を中心とした自作の文法問題(10問)を作成し配布したところ、受講生はクイズを解くように解いていった。いろいろな言葉がわかって面白いそうである。受講者の原稿から訂正が必要だった表現も含めておいたので、受講者を想定して作成したものは、やはり手ごたえが違ふと感じた。最後に解答をみせて自己採点をさせた。自主学習も充分にこなしていた。

8. 第8回「互いに論文を読み合おう」「ふりかえり」

受講生の都合でこの日の参加者は2名だった。書いた本人が自らの論文の「序論」「本論」「結論」と区切って声を出して読み、内容が理解できたか聞き手に確認をとり、自由に意見交換する活動を行った。「ここがわかりやすい」、「ここは、もっとこうしたほうがいい」などといった積極的な意見が得られた。内容についても議論し、役割を交代した。

次に、第5回の授業で受講生全員で決めた評価表を用いて、2人に相互評価をさせた。その結果、評価表を使用したことで、評価が可視化され、良かったとの感想が得られた。

また、シートに書かれた「ふりかえり」の内容は以下のとおりである。

受講者C：学びたいことが学べました。論文の組み立て、内容の整理、注の必要性、論文式の用語の使い方などが役に立つものだと思います。[ママ]

受講者S：思う以上勉強になりました。論文の書き方と論文らしい日本語の使い方について学べました。小さい論文を完成するという課題を出され、論文を書く練習になり、また、日本語のミスを修正していただくことが大変学びになりました(モデル効果)。これからの修士論文に役立つと思っています。[ママ]

受講者M：(「日本語で①美しく表現し、②上手く説明でき、③正しく④わかりやすく文章を書けるようになりたい」と初日に書いたこの受講生は、それぞれに対して以下のようなコメントを書いた。)

①まだ思ったほど美しく表現できないが、シンプルな単語で表現することもできることが気づき、alternativeな方法を見つけました!

②読者の気持ちを考えて書くようになりました!! そのことで、読者にとって読みやすく書けるようになったと感じます。

③まだ復習が必要です!!

④②に書いたように、読者(先生)のコメントを得たので、論文の流れや構造をわかりやすく書けるように感じました!! (先生のおかげさます!!) [ママ]

どのコメントもありがたいと思う。この講座の準備期間から最終日まで、授業準備やメールなど、受講者のためにと考えて実践したことが確かに実を結んでいる事がわかる。また、このクラスの目標である「母語話者が書いた論文と変わらない日本語で論文を書くこと」にも確実に近づけたのではないだろうか。

おわりに

以上、「日本語論文指導講座」全8回の授業の報告を行った。院生たちの顔は、小規模であっても日本語で論文を書き終えたという満足感で満たされており、口々に感謝の言葉を述べていた。この講座は、受講生にとって修士論文を書く上で役に立つこ

とは間違いなく、院生と教師の間のやりとりは、双方にとって学ぶところの多いものであった。

このような機会をいただいたことを、この場をお借りし、感謝申し上げます。

【注】

- (1) 実際の論文と同様の長さではないが、論文に求められる表現や構成を備えた小規模な論文を受講者に書かせた。
- (2) KJ法：データをカードに記述し、カードをグループごとにまとめ、図解するなどして、論文等にまとめていく手法。共同での作業にもよく用いられ、「創造性開発」（または創造的問題解決）に効果があるとされる。

【使用教科書】

アカデミック・ジャパニーズ研究会 編著（2015）
『改訂版 大学・大学院 留学生の日本語④論文作成編』アルク

【参考文献】

石黒圭（2012）『この一冊できちんと書ける！論文・レポートの基本』日本実業出版社